

名前：

最近、大手の新聞社3社が「合同で、新聞記事を読み比べるためのインターネットサイトを立ち上げると」いうニュースに接した。この動きは、新聞とインターネットが二項対立しているという考えから見れば、新聞側の自殺行為のようにも思われる。そして、ある意味でこれは、メディアとして紙を使ってきた人間からしても、インターネットという媒体の方が優れており、旧来の形態に固執し続けることが困難であることの一つの証拠となっている。現実として、定期刊行物を買うのではなくインターネット上で情報を収集する層は着実に増加している。

私自身を見ても、新聞を毎朝チェックするという習慣を捨てて久しい。時折、大学の図書館で何紙か読むこともあるが、それはあくまで暇潰しである。ニュースを見たければインターネットでいつでも、好きなときに見れる。更に、ネットは、更新される回数も多いために、リアルタイムな情報を得られる。し

かし、一方で、その更新の容易さゆえに、過去の情報が「時の流れに流されて行く」速度も速く、ニュースの保存という点で見ると新聞や雑誌に一步ひけを取っている。現時点で言えば、(例えば、何らかの調査を行う際などの)資料として有用性ゆえに、「もう新聞は要らない」とまでは言えないのだと思う。だが、同時に、私の考えは、裏を返して、データベースとして、インターネット上のニュース記事を保存・管理するようなシステムができれば、新聞・雑誌は不要になるという論理も内包している。

これから先、新聞・雑誌がこの世から消えて、電子メディアのみが情報の媒体として残るかどうかわからない。この問題の結論は、インターネットの側が、紙媒体的な保存可能性を完備しているかどうかにかかっているというのが私の考えの要点である。紙媒体の側が、何らかのクオリティーで対抗策を立てることは極めて現実味が乏しい。